一

松江

074
140

島根縣名勝誌

第四門
冊 一
函 六
架 七
號 一〇〇二三
抹消
松江圖書館

松江圖書館

上壽夫
田正矩　校閲
原碧雲　編

島根縣名勝誌

松江　有田有斐堂藏版

勝部占一郎君寄贈

緒言

三千年來の史籍を有し、上つ代の神都として知られたる古雲州の地、山は綠に水清く、秀麗の地氣磅礴して、北海の濱、別に一仙寰をひらき、翠波瀲灧たる宍道湖の風色、白扇水に映ずる中海の眺望はいはずもあれ、源遠き簸の川上の神蹟、瑞雲かをる清のふるさと、さては、椽木高知れる天日隅の大宮をはじめ、八重柴垣の昔を忍ぶ三保が埼、霜葛くるやくるやに、河船のもそろもそろに引き寄せし支豆支の御埼、狹田の國、掠見の國など、神代の古蹟は、をさめて百七十方里の裡にたたためり。

けだし、名勝は國の裝飾物なり、古蹟は國の紀念物なり。

貴092.9
12

9394
0
10033

類分號番
郷土資料
一〇〇三三
島根縣立圖書
昭和6年11月19日

史的感想を喚起し、崇祖愛國の思想を發揮せしめ以て心性を高潔にし、趣味を高尚ならしむ。國は亡ぶるも、山河は依然として幾多志士の感懷を動かすに足る。いはんや、萬世一系の皇統を戴き、萬古不拔の國土を有せるわが日本帝國勃興の舊地、豈傳ふるなくして止むべけんや。

神宅臣金太理が、出雲風土記を撰述してより、ここに一千一百七十四年、名勝誌、漫遊案内の書、續々梓に上るといへども、建國の歴史に大關係を有せる出雲の名勝舊跡は、いまだ洽く天下に紹介せられず。この國に生れ、この地に人となり、その絶景に感化せられ、その風色に薫陶せられしもの、その由來を叙し、そが勝景を紹介するは、吾人の務にあらざるなきか。

本書稿成りて、村上壽夫、内田正矩両君の校閲を請ふや、繁務のかたはら、親しく校訂の勞をとられ、有益なる資料と、注意とをたまはり、かつ石見、隱岐の名勝舊跡をも加へて出版せんことを勸告せらる。即ち筆をつぎて後篇をものすることとはなしぬ。加ふるに文辭の修飾につきては、恩師淺田四郎先生に負ふところ少からず。ここに、その事由を記して、感謝の意を表す。

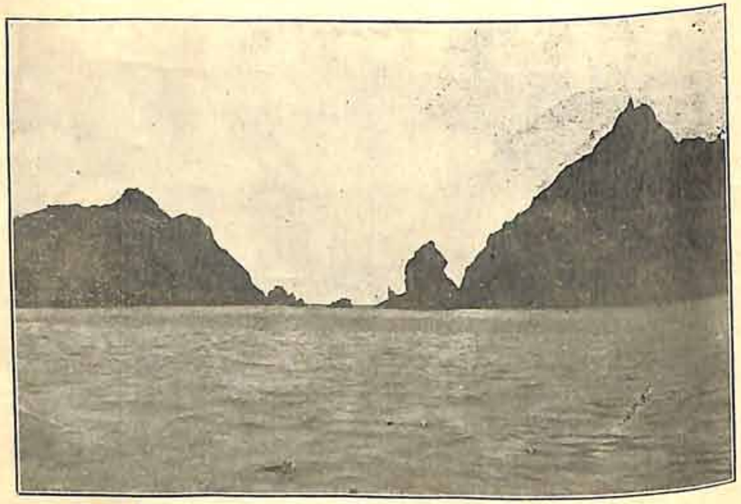
紀元二千五百六十六年六月一日

若葉しげれる書窓の下にて

奥原碧雲識

明治三十九年　月　日

西鄉港頭（隱岐國）



竹嶋（隱岐國）

り。津戸、福浦等の小港あり。

檀鏡瀑

檀鏡瀑は都萬村大字那久にあり。檀鏡川の上流横尾山中にありて、高さ十七丈、幅一丈、水勢甚盛にして幽邃の一境なり。西郷より陸路三里半にすぎず

水若酢神社

水若酢神社は五個村大字郡村にあり。西郷町より四里、古來一ノ宮と稱し、延喜式神名帳に見えたる大社にして、水若酢命をまつれる國幣中社なり。

玉若酢命神社

玉若酢命神社は、西郷町の西方二十町はかり、磯村大字下西にあり。玉若酢命を祀る、もと、惣社と稱し、今縣社に列せらる有名なる八百杉はその境内にあり。祠官億岐氏は、隱岐國造と稱し、島内の門閥家にして、驛鈴を所藏せり。

竹島

竹島は、明治三十八年二月島根縣の領土に編入せられ、同年五月二十八日、日本海大海戰によりて、光榮ある島名を宇内に發揚せり。この島は、隱岐列島と欝陵島との間にある一群の岩嶼にして、隱岐古記集に「島前より亥の方四十里にして松島あり、周り一里程にして、生木なき岩島なり」と見ゆるはこれなり。朝鮮水路誌には、嘉永二年、佛國船これを發見せしよし（船名を以てアンコール列岩と命名せり）を記すれども、隱岐の漁人等は、數百年前、既にこれを發見し、隱州視聽合記（寛文七年編纂）にも、松島の名を以て紹介せられたり。（舊記に見ゆる竹島は、欝陵島のことにして、この新竹島にあらず、水路誌に欝陵島一名松島とあるは疑はし）。西郷を距ること約百浬、二箇の岩嶼と數十の小礁とより成り、甲嶼は海拔三百八十一尺、周圍十五町、乙嶼は海拔二百二十六尺、周圍十町ばかり、岩容險峻、沿岸はすべて斷崖絶壁にして泊舟の地なし。全岩一の樹木なく、飲料水なく、もとより住居に適せず。ただ海驢の群集地なるを以て、漁期に至れば、海驢獵のために渡航するもののあるのみ。

あしかのみ海人がとら入し竹島は、鯨のえものおもひかけきや。　高崎正風

百三十二

雲霧を伊吹(いぶき)はらひし神風に、竹島の名もあらはれにけり。

仝　人

ろしかく蕭條たる。一祠の以て尼子氏の靈を慰するなく、一碑の功を千歳に傳ふるなく、故墟落日、悲風晩靄をとざし、斷礎荒垣蔓草に埋るる處、颯々たる松風、陰雨に和して、半夜幽鬼の啾々たるを聞くのみ。

頂上きはまる處に、勝日高守社といふ小社あり。式内の古社にして、大國主命の幸魂を祀れり。

これより急坂を辿りて、鹽谷に下り、山麓に沿ひてゆくこと數町、人家の傍なる山腹に、一株の古松枝を垂るる處、一基の五輪塔あり。高さ五尺、塔身僅に尺餘。四面に梵字樣のものあれど、崩壞して讀むべからず。これを月山城主尼子經久の墓とす。塋域廣さ數歩、柵の圍むなく、蔓草の延び、落葉の埋むるに任す、あゝこの地、千古の英雄が永眠せる處なるかをおもへば感懷きはまりていふべき言葉を知らず。

やかて、富田川を渡り、景清矢立松の遺址を一見して、石階を上れば、老杉蔚々として墜道をなす。ここを過ぐれば、樓門あり、壯嚴なる社殿あり、これを富田八幡宮といふ。近郷十三村の宗社として崇敬せし處、今、郷社に列せらる。もと、月山頭にありしが、惡七兵衛景清月山に城かんとし、神廟に祈り、暗中矢を射て、その矢の達する處、即ち神意のある處なりとて、この地に移遷せりと傳ふ。世々月山城主の崇敬せし所にして、境内頗る幽靜なり。

かくて、月山附近の探究を了へ、山口氏と別れて旅舍にかへりしは、午後一時半なりき。

（明治三十八年十月廿六日）

竹島渡航日記（抄錄）

夜一夜、日本海の海波に搖られつつ、いつしか、華胥の國に遊びぬ。「竹島見ゆ、竹島見ゆ」との聲に驚かされて、甲板に上りし時は、太陽既に東天に昇りて、竹島の巨岩は近く眼前に橫はれり。忽ち見る、三頭の鯱（海豚屬）舷頭を掠めて猛進し、背部をあらはすこと數回、無數の海鷗亂飛し、數千の海驢岩角洞窟に群集して、吼聲さながら怪物の悲鳴するが如く、喧々囂々數十町の外に達す。

突兀たる兩巖、峨々として海面を拔くこと數百尺、斷崖峭壁屛風を列するが如く、寒潮岩脚を浸蝕して處々に洞門を開き、幾十の岩礁その附近に羅列す。水深くして數町の附近ま

で船を寄するを得れど、海底不良にして投錨すべからず。この日、海上靜穩なりしかば、直に端艇をおろして、一行西嶼に上陸す。

春曉千金の夢を貪れる海驢の群は、一行の來航に驚き、轉輾岩角よりおちて水中に沒し、忽にして數百の頭顱を波上にあらはし來る。漁夫は洞門に刺網をはりて、瞬く中に數頭を獲たり。ああ、かれ等が日本海中の樂園として、幾百年間占有せしこの巨岩も、文明の潮流は滔々としてこの樂土を奪ひ、銃聲一發岩角に響くや、淋漓たる鮮血海面を染めて、死屍は波間に横はる。しかも感覺、遲鈍なるかれ等の群は、この慘狀を知らざるものの如く、數十また數百、頭部を露出して悠遊するさま、むしろ憐むに堪へたり。

西嶼の調査を了へて東嶼に渡る。岩上幾百の海驢眠未ださめず。漁夫櫂をとり、滿身の力をこめて一打すれば、六尺の海驢血に染みて櫂ために折る。而して、他の海驢は依然として惰眠を貪るものの如し。兩岩相對する處、稍平なる砂礫濱あり。その邊に竹島漁獵會社の假小屋二棟あり。それより、岩角を辿り、楷子にすがり、絶壁を攀ぢ、劍背を亘りて上る、危險いふべからず。衆多く半腹より引きかへし、絶巓に達せしは八名にすぎず。頂上に立ちて眺望すれば、水天彷彿際涯を知らず。回顧すれば、昨年五月二十八日、わが聯合艦隊は、露國艦隊を本島の南方約十八浬の海上に要撃して、敵の司令官ネ將軍をして、艦隊をあげて降伏せしめし處。砲聲轟々天地を動かし、硝烟爆烟海面をこめて、海若躍り、蛟龍怒り、狂瀾萬疊雪山を捲き、大濤澎湃鯨鯢を呑むの間、泰然自若たる東郷大將の面影も想見せられて、西方はるかに淡靄をひけるは鬱陵島にやあらん。露國艦隊司令長官魯提督を生擒せしは彼方にやなど、浩然たる大觀に接して、天空海闊、身神既に塵寰のものにあらず。各紀念の松樹を栽植して下る。一歩を誤れば、千仭の巖窟に陷りて、粉碎免るべからず。戰々兢々、冷汗背をうるほす。

一同視察を了へて、本船にかへり、竹島を一周す。海波漸く高く、海上不穩の兆あり。即ち鬱陵島に避難することに決し、同島に向つて航行す。時に午後二時三十分。

（明治三十九年三月廿七日）

島根縣名勝誌（終）

明治三十九年八月卅日印刷
明治三十九年九月一日發行

不許複製

定價金二十八錢
郵稅四錢

著者　奥原福市
出雲國八束郡秋鹿村岡本九四八番地

發行者　有田傳助
松江市末次本町七二番地

印刷者　中村彌助
東京市京橋區日吉町十番地

印刷所　近藤商店
東京市京橋區日吉町十番地

發賣元　松江市京店　有田傳助

大賣捌所
松江市　大芦書店○川岡書店○園山書店
濱田　安達書店○古井書店
今市　遠藤書店○直良書店
伯州米子　今井書店

島根県立図書館
91015489-2